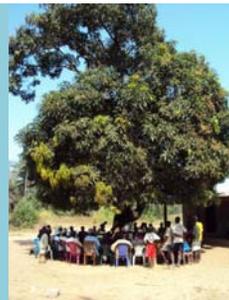


プロジェクトニュース



シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

県・村落開発フォーラム全国大会特集号 2011年6月 (Vol.17)

はじめに

1. 運営指導調査の実施
2. 離任にあたり 反町専門家
3. 県・村落開発フォーラム全国大会の実況中継
 - 3.1 フォーラム全国大会までの奮闘記
 - 3.2 フィーダー道路改修プロジェクト編
 - 3.3 あついよ、あついよ、カウンターパート。その裏にあるものは
 - 3.4 本省スタッフは頼もしい！
 - 3.5 モデルワード選定に見た県議会職員の個性
4. 大好評のコラム
 - 4.1 シエラのチカラ –ミス カンビア第二弾 建国50周年バージョン–
 - 4.2 シエラのチカラ –次官補の戦略–



シエラレオネ



プロジェクト対象県

*プロジェクトHPにもアクセスください：<http://www.jica.go.jp/project/sierraleone/0901171/index.html>

はじめに：

2011年5月に入り、プロジェクトは開始以来1年半が経過しました。これまでに蓄積した多くの活動実績や抽出した課題をまとめ、シエラレオネの関係者と共有し、今後のプロジェクトの方向性を確認する月になりました。

そして、5月中旬には運営指導調査団を JICA 本部から受け入れ、シエラレオネ政府関係者と今後のプロジェクトの方針について協議した結果をまとめ、新たなスタートを切ることになりました。

一連の協議の節目の機会として、3つの重要な会議がシエラレオネ関係者とプロジェクト関係者の間で共催されました。私たちは一連の会議を「5月の3大会議」と呼んでいます。



運営指導調査団による現地調査。荒団長 (左) と早瀬団員 (中央)。

3 大会議の内訳ですが、県の関係者でプロジェクトの今後の方向性と計画を協議した第 4 回ステアリングコミティー会議。地方自治地域開発省にてプロジェクトの活動進捗と今後の活動を確認した第 2 回合同調整会議。

そして今回の大きな目玉は、地方自治地域開発省と共催の県・村落開発フォーラム全国大会です。同フォーラム全国大会の目的は、シエラレオネ全国に 19 ある地方行政の代表者と、首都フリータウンから省庁、ドナーなどを招いて、本プロジェクトの経験と今後構築しようとしている県・村落開発モデルの意見交換を行い、今後の活動に役立てる、とうものです。

県・村落開発フォーラム全国大会では、本プロジェクトが広くシエラレオネ全国に知られることになり、参加者から貴重なコメントもあり、非常に有意義な機会となりました。また、全国から多くの参加者を前に、本プロジェクトのカウンターパートである県議会と本省の職員、そしてワード委員会の代表者が発表のほぼすべてを担い、質疑応答も主体的にこなしていたこと、本省の職員が主体的にフォーラムの様々な下準備をしたことは、特筆すべきことです。

全国大会のフォーラムの準備には、専門家も多くの時間と労力を費やし、カウンターパートの発表準備支援を行いました。そのやり取りを通じて、県職員を中心としたカウンターパートと専門家との信頼関係がより一層強まりましたし、多くの人の前で発表した関係者の大きな自信になったと自負しています。

今回のプロジェクトニュースでは、舞台裏を含む県・村落開発フォーラム全国大会の様子を中心に特集号を組んで、皆さんにお伝えします。
(平林リーダー)

ニュース 1 : 運営指導調査の実施

プロジェクト開始から 1 年半近くが経過し、今後、県・村落開発モデルを踏まえてモデルワードプロジェクト及びフィーダー道路改修プロジェクト（フェーズ 1 ターム 2）が開始されるタイミングで運営指導調査を実施しました。

今回の調査の目的は、①これまでのワードレベル、県レベルで実施されたパイロットプロジェクトから得られた教訓や課題、また、それらをとおして策定されつつある県村落開発モデルの内容について確認すること、②今後の



5 月 26 日に地方自治地域開発省と共催した県・村落開発フォーラム全国大会の様子。



フィーダー道路改修工事現場を視察。プロジェクト専門家や県議会職員に質問する早瀬団員（左）

モデルプロジェクトの実施概要（全体プロジェクトの中でのモデルプロジェクトの位置づけ、プロジェクト実施プロセス等）を確認することなどでした。また、1年半のプロジェクト活動結果を踏まえて、プロジェクトの計画をまとめたプロジェクトデザインマトリックス（PDM）を改訂することも主な目的でした。

現地のプロジェクト実施のパートナーである地方自治地域開発省、県議会、ワード委員会との協議をとおして、県村落開発モデル、言い換えれば、県議会やワード委員会の開発プロジェクト事業実施における計画策定・事業実施・運営維持管理における役割や機能、また、関連省庁との連携のあり方等が明確になりつつあることが確認できました。



現場にて県職員（左）から聞き取りする荒団長（右）。

また、今後のモデルプロジェクト実施概要、特に、モデルプロジェクトを「なぜ」実施していくのかという目的について再度地方自治地域開発省、県議会と確認しました。

モデルプロジェクトの実施目的は、「**県村落開発モデル（案）に沿ってモデルプロジェクトを実施し、地方自治地域開発省、県議会、ワード委員会がそのモデルを検証し、県村落モデル・ハンドブックを改善していくこと**」なのですが、この点について、関係者の共通認識を醸成することができたのは今後の活動を実施するにあたり非常に意義のあることだったと考えています。

今回の調査で特筆すべきことは、一連の地方自治地域開発省、県議会、ワード委員会との協議、また、「5月の三大会議」への参加をとおして、プロジェクトがシエラレオネ国関係者の高い主体性のもと着実に実施されつつあることを実感できたという点です。



地方自治地域開発省大臣らとミニッツの署名を行う。中央が大臣。右隣が荒団長。

この背景には、プロジェクト実施時において、専門家の方々がカウンターパートを「主」として協力してきた成果だと思えます。この勢いで、確実にシエラレオネにおいて地域開発におけるモデルが策定・実施され、一層質の高い行政サービスが提供されることと思えます。

（早瀬団員、経済基盤開発部）

ニュース2：離任にあたり -反町専門家-

2008年のシエラレオネの人間開発指数が179カ国中179位と発表された時、「いつか行ってみたい。」と漠然と思いました。その2年後、このプロジェクトに携わる機会に恵まれ、こんなに早くシエラレオネを訪れる機会を得たことにとっても驚きました。

このプロジェクトでは、ワード委員会、県議会のキャパシティアセスメントとして携わりました。ワード委員会のアセスメントをする中では、彼らが独自に考えたやり方でパイロットプロジェクトを実施していたことに驚かされるとともに、こんなやり方もあるのだと勉強させられました。今回私たちが見つけた彼らのキャパシティは、ほんの少しだけだと思います。

本プロジェクトは“やらせてみせる”段階に入り、いよいよカウンターパートである県議会職員が主体となり事業が実施されます。彼らがどんなキャパシティを見せてくれるのか期待したいと思います。

シエラレオネの現地食で代表的なソースと言えば、キャッサバの葉、クリンクリン（モロヘイヤ）、ポテトの葉です。私の名前である「サキ」とは、シエラレオネのメンデ族の言葉で「キャッサバの葉」のことだそうです。不思議な縁を感じるシエラレオネ。「また、いつか行ってみたい。」が、また現実になるように。



カウンターパートらと一緒に。左から& が反町
専門家。右から2番目は近藤専門家。

（反町専門家：キャパシティアセスメント・コミュニティ開発担当）

3. 県・村落開発フォーラム全国大会の実況中継

5月26日に地方自治地域開発省と本プロジェクトで共催した「県・村落開発フォーラム」では、シエラレオネの地方行政を通じた県・村落開発のあり方について、本プロジェクトの経験を広く全国の関係者と共有し、参加者からの活発な意見・質問を得る機会となりました。

全国の地方行政代表者、パラマウントチーフと呼ばれる地域住民代表者、関係省庁など多くの関係者を招いて行われたフォーラムでは、本プロジェクトからプロジェクト進捗報告書を参加者に配布するとともに、カウンターパートである県議会職員、本省職員、ワード委員会代表者が活動報告をしました。

参加者からは、本プロジェクトにおいて、県議会と関係機関との連携を重視していることや、地方行政を通じて住民に視点を置いた支援への賛同の声が上がりました。また、本プロジェクトで開発する県議会職員およびワード委員会向けのハンドブックのコンセプトについても参加者と共有することが出来、今後の活動の方向性を確認することができました。「まずはやってみる」ことに大きな意義がありました。

全国大会のフォーラム成功の裏には、カウンターパートと彼らを支援する専門家一同が日ごろから築いた信頼関係のもと、多くの時間と労力をかけたことがあげられます。会議は時として、眠気を誘うものです。しかし、随分と前からカウンターパートである発表者の準備に関わり、発表者本人を知らば知るほど、眠気を誘うどころか、はらはら、どきどきするものです。

ここでは、県・村落開発フォーラム全国大会を中心に、会議の舞台、そして舞台裏をお伝えします。これも大切なカウンターパートの能力向上の機会です。そして専門家との絆がさらに強くなったのは言うまでもありません。

（編集長）

3.1 県議会エンジニアのフォーラム全国大会までの奮闘記

カンビア県議会エンジニアのジボ氏（愛情をこめてジボ君と呼ばれています。以下、ジボ君とします）がフォーラムで発表することが明らかになったのは、フォーラム 10 日前の 3 大会議スケジュール確認中でした。

カンビア県では上司である主席行政官から「ひとつだけ心配事がある。エンジニアのジボが発表なんて信じられない。」と言われ、こちらは「いや、プロジェクトでも発表をサポートします。」と説明するものの主席行政官からは「本当に彼はできるのか？大丈夫なのか？」と逆に質問され、プロジェクトスタッフとともに困ってしまいました。

実は、前日もジボ君をめぐっては、ポートロコ県で 3 大会議のスケジュール確認の際に、ステアリングコミッティでポートロコ県のエンジニアとカンビア県の主席行政官が発表する項目について、ポートロコ県主席行政官より「なんで、カンビア県はエンジニアが発表をしないんだ。両県ともエンジニアが発表するべきだ。」と、ちょっとした騒動になっていたのです。

ジボ君は両県議会から注目の的になっていたのです。そんな騒動が起こっているとは知らないジボ君。

フォーラムに向けて毎日、発表内容、プレゼンテーションのやり方、心構え、服装等々、県議会職員や、プロジェクトスタッフからあらゆる講座が開かれ、指導を受けていました。毎日必死に発表の準備と練習をしているせいか、顔つきは日に日に険しくなっています。

発表 5 日前の午後も、事務所であらゆる指導を受けていたジボ君。今まで見たことない程の険しい表情でプロジェクトエンジニアにアドバイスを受けながら発表資料を読んでいたかと思うと、突然、「もう僕は混乱した。」という言葉を残して逃亡。

プロジェクトエンジニアが呼び止めにも応じず、県議会から姿を消してしまいました。

行方を晦ましてから 2 時間後、ふらっと事務所に現れ、「僕は少しずつしかできないんだ。少しずつならできるから。」と言って去って行きました。



プロジェクトエンジニアから講義を受ける県議会エンジニア（中央）



宿谷専門家（左）の前で練習成果を披露するカンビア県議会エンジニア（中央）と余裕のあるポートロコ県議会エンジニア（右）

次の日からは、発表内容の要点をまとめた紙を使い発表の練習を始めました。宿谷専門家の「**食事の時も、寝る時もトイレに行くときも肌身離さずこの紙をもって練習するんだ。**」という言葉に従ったかどうかはわかりませんが、少しずつ着実に進歩がみられました。

発表3日前、現場の進捗のモニタリングに行ったジボ君、しかし、極度の緊張のせいか体調不良を訴え事務所に戻るのを拒否し、家に引きこもってしまいました。プロジェクトエンジニアが家に押し掛け、発表の練習をするも、その後は携帯電話も音信不通状態になってしまいました。まさか、このまま家に引きこもってフォーラムを欠席してしまうのではと誰もが心配をしましたが翌日は、元気な姿でステアリングコミッティ会場に現れました。フォーラムでの発表準備はどうかと聞くと、「ばっちりできている。」と余裕の答えが聞けました。きっと、家に引きこもりひとりで猛特訓したのでしょう。

2日後はいよいよ発表の舞台、フォーラムです。続きは次の宿谷専門家からの実況中継をご覧ください。

(反町専門家：キャパシティアセスメント/コミュニティ開発担当)

3.2 フォーラム全国大会 –フィーダー道路改修プロジェクト編–

フィーダー道路改修プロジェクトは、県開発計画モデルに組み込まれる広域の視点が重要なプロジェクトとして実施しています。フォーラム全国大会では、今までの活動経過と今後の県開発計画の方向性を説明する重要な会議でした。発表者は、ポートロコ、カンビア両県の県議会エンジニアです。

まず、ポートロコ県のエンジニア、ハッサン氏が口火を切りました。フィーダー道路改修プロジェクトの概要とポートロコ県のプロジェクト説明です。前週の土曜日にわざわざポートロコからカンビアの事務所まで来て、一生懸命準備していました。

良くも悪くもお調子者ハッサン氏。最初は、大臣の前からかいつもの饒舌が見られず、緊張感がありあり。ただ、スライドが2枚、3枚と進むうちに、だんだんと調子に乗ってきました。内容は悪くなかったのですが、予定の15分を大幅に超えた25分くらい説明していました。



スライドを見ながら熱心に説明するポートロコ県議会エンジニアのハッサン氏（中央）

さて、次は反町専門家の報告にもあったカンビア県のエンジニアのジボ氏です。カンビア県のプロジェクトを説明します。2日前の練習では、制限時間どおり内容もちゃんと話せていましたが、見ている方がドキドキです。

まず、出だしのあいさつはまずまずでした。しかし、プロジェクトの説明を始めると、スライドの方を向きっぱなし、聴衆の方を一切見ません。マイクも口から離れ、しまいにはマイクを使ってスライドを指す状態。周りからマイク使え！との怒号が飛び始めました。さらに緊張感からか、持っているノートのメモを棒読みし始めました。言っている内容は良いのに。。。

そこで、後ろに立っていたハッサン氏がノートを取り上げました。しっかり覚えているので、それでもちゃんと話せます。ただ、まだマイクを使えず、それでは皆に聞こえません。苦肉の策として、私が壇上に上がり、黒子となってマイクを持って彼の口に充てていました。そして、何とか終了。彼にとっては長い15分だったでしょう。ただ、終わった後の彼の清々しい顔を見てほっとしました。

最後は、またハッサン氏が登壇しプロジェクトの教訓の説明です。もうすでに緊張感から解放され、完全にいつもの通りです。“Hey, Let’ go next!”、次のスライドを促すのにこんな調子で、指をパチンと鳴らしてオペレーターに指示していました。



スライドと向き合って熱心に説明するカンビア県議会エンジニアのジボ氏（中央）

今回のフォーラムでは改めて、カウンターパートがプロジェクトの実施を通じてこちらの意図を理解し、また知識を吸収していることがわかり、うれしく思いました。エンジニア達も忙しく四六時中一緒にいられる訳ではないのですが、次のフォーラムでは、もっと経験を積み、素晴らしい発表ができることと思います。

(宿谷専門家：調達制度・道路計画担当)

3.3 あついよ、あついよ、カウンターパート！その裏にあるのは、、、

運営指導調査ミッションの中でカウンターパートと協議をする機会が沢山ありました。協議の間に、しっかりと耳をかたむけてくれるカウンターパート。大臣や副大臣、次官や地方議会の議長や行政官たちみな全てが熱心に耳をかたむけ、ときにはしっかりと彼らの意見を伝えてくれました。

協議の中で感じたこと、それはカウンターパートのプロジェクトに対する熱意です。協議を重ねるごとに、彼らの熱意・プロジェクトへのあつい思いが伝わってきました。そんな中で特に彼らのあつさを感じた瞬間は。。。

5月の三大会議のプログラムとして、プロジェクト概要について説明するセッションがありました。そのセッションを担当したのはポートロコ県の主席行政官。3つの会議でほぼ同じ内容の説明を繰り返すことになるのですが、毎回毎回、会議の参加者へ向けてプロジェクトの内容について誇らしげに、また、またマイクがこわれるほどの大きな声であつく語りかける彼の姿は印象的でした。

一連の協議や会議への参加をとおして感じたカウンターパートの主体性、プロジェクトへの熱意、あつさ、そしてプロジェクトへの愛情。これがどこからくるのか判明するまであまり時間がか



熱い説明をする県議会主席行政官

かりませんでした。それは、一大イベントである県・村落開発フォーラム全国大会でのこと。地方自治地域開発省次官や県議会次官がプロジェクトの内容について説明するのに混じって、若手の県議会エンジニアがパイロットプロジェクトの説明をしていたときです。

全国規模のフォーラムでスピーチする機会がはじめての彼にとって、100人以上の参加者の前でプロジェクトの説明をするのは至難の業です。緊張しながらプロジェクトの説明を始める彼、そこにマイクの調子が悪くなるというアクシデント。そして、パワーポイントを使用して説明することに慣れていない彼はプロジェクトの前にたち、スライドの前で必死に説明するも、彼のTシャツがスライドになってしまうというアクシデントまで発生してしまいました（本人は気づかず・・・）。それをみた出席者から野次がとぶ。。。そこへ、彼の発表をあたたく見守っていたプロジェクト専門家が彼に歩みより、マイクを彼のかわりに持ってあげ少しでも彼の緊張をほぐそうとしていました。



県・村落開発フォーラム参加者の様子。

このようなサポートもあって彼は無事にプロジェクトの説明を終了しました。

その専門家の姿をみて、専門家による普段のカウンターパートへの協力姿勢が垣間見れた気がしました。時には技術移転をする専門家として、時には親として、時には兄貴として。そんな関係を専門家とカウンターパートが築けているからこそ、カウンターパートは専門家の協力のもとプロジェクトに主体的に取り組み、そしてプロジェクトに愛を感じることができるとはでないでしょうか。

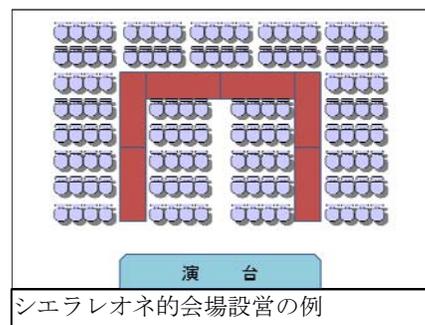
(早瀬職員：経済基盤開発部)

3.4 県・村落開発フォーラム全国大会の舞台裏 —本省スタッフは頼もしい！—

今回のフォーラム全国大会開催の下準備は、平林リーダーの助言のもとではほぼ本省のシ国側人財の力で行われました。私は前日にフリータウン入りし、会場設定の細かな指示と少々の調整業務を行ったのみでしたが、大きな問題も無く無事に初の全国規模のフォーラムを終了することができました。

【準備編】 会場設営については、センスと言えは宜しいのでしょうか、フォーラム全体のイメージが出来ないためなのかシエラレオネの文化なのか、机をコの時に並べ、椅子を正面に向けて並べるといふ、なんとも珍しい配置をしておりました。フォーラムの開催イメージを説明し、席の配置を理解してもらうまで約30分。「所違えば座席配置も随分違うものだなあ」と学んだ瞬間でした。

準備が終わると、「机を移動したから、何かくれてもいいんじゃない？」と会場設営の責任者から迫られましたが、「追加費用が必要な



ら領収書を切ってくれば支払はするから大丈夫だよ。心配しないで。」と切り返すと、その後は何も要求をされなくなりました。そのやり取りを見ていた本省のアシスタントからは「毅然と対応してくれて有難う」と声をかけてもらえました。

【フォーラム当日編】フォーラム当日は、参加者名簿の作成、お茶休憩の準備、昼食の準備、日当の支払と、本省スタッフも大忙しです。改善点は多々ありますが、何とか当日も本省スタッフの頑張りで大きな問題はなく乗り切ることができました。

フォーラム開催でもっとも問題となるのは、「招待者以外の訪問者への対応」です。シエラレオネでは偽名を使って日当を受け取り、食事を食べて帰ってゆく「フォーラム荒らし」と呼ばれる人々がいるようで、今回のフォーラムでもその「フォーラム荒らし」と思わしき人物が数人出現しておりました。しかしそこは経験豊富な本省スタッフ。「荒らし」の一人と思わしき、明らかに普通のおばちゃんにしか見えない女性が「〇〇県の県議会議員だけど」と受付で頑張っていたのですが、「身分証明書はどこ？ 招待状は？ あなたの県の首席行政官の名前は？」とその女性質問を浴びせかけ、見事に女性を帰路につかせていました。なんとも頼もしい本省スタッフの姿を見ることが出来ました。



フォーラム全国大会の様子。

【フォーラム後日編】「招待者以外の訪問者への対応」の別の側面で、「招待した方がたくさんの部下を引き連れて参加してくださる」という別の問題もやや見られました。各省庁1名で招待状を出したのですが、複数名来て頂けました。フォーラムの興味をもっていただき大変喜ばしいことなのですが、日当や当日の食事は1名分しか用意しておらず、とはいえ関連省庁の重要ポストの方々も多いため無碍にはできず、「後日日当をお届けに参ります」とフォーラム終了後も何かと本省スタッフの仕事は続いておりました。一部省庁においては JICA SLFO の皆様にも日当配布にご協力いただき、誠に有難うございました。

一年後に第2回フォーラム開催を予定しております。次回は今回のフォーラム開催から学んだ教訓を活かし、よりスムーズな運営とより内容の充実したフォーラムになることと思います。大きな失敗をしないように側面から技術サポートを行い、取り返しのつく小さな失敗を経験しながら、少しずつ少しずつ成長をして行ければと思います。(吉野専門家：業務調整・研修計画・村落開発担当)

3.5 モデルワード選定に見た県職員の個性

4月15日、モデルワードの選定基準について合意するためのステアリング・コミティー会議を開催しました。その際、カンビア県の首席行政官が、大変分かり易い説明をしてくれ、誰もが納得できる基準に従い、公平に選定を進めていこうと関係者間で合意しました。その後、合意した基準に従い、各ワードのアセスメント結果の点数化を行いました。パイロットプロジェクトの完成に工期よりも1カ月以上を要したワードを候補から除外し、各チーフダムで最も点数の高かったワードを選定し、残りの枠については、残ったワードの中から点数の高いものを順次選定するという方法で、選定作業を進めました。本結果について5月24日のステアリング・コミティー会議にて関係者間で共有する事となっていました、その前に、まずは各県内の関係者で合意を図る事としました。

カンビア県は25のワードより3ワードが工期を満たさず、したがって21ワードより8ワード、ポートロコ県は7ワードより2ワードが工期を満たさず、5ワードより4ワードが選定される事となっていました。カンビア県は候補のワードが多数ある中で公平な絞り込みをするのが困難でしたが、前回のステアリング・コミティー会議で公平性や透明性を強調してくれた首席行政官がいるので、選定結果の共有も彼を中心にうまくまとまるだろうと想定していました。



カンビア県議会にて、首席行政官を囲んで協議中。

ところが、いざ選定結果を目の前にすると、県職員等は口を噤んでしまいました。議長や副議長などの政治サイドの前に、まず行政サイド側での会議を開きました。すると、選定基準について一番理解のあると想定していた首席行政官がまず、「7つのチーフダムより最も点数の高かったワードを選定する事については合意した。だが、最後の枠の8つ目については、サム・チーフダムではなく、マグベマ・チーフダムのしかも県都の置かれているワード122として欲しい。」と言い出してきました。首席行政官がそう言い始めると、他のスタッフも彼に従い始めました。こちら側より、「それでは説明がつかない。今まで話をしてきた事をひっくり返す事になる。今後同じように要望が挙がってきた場合に県議会も対応しきれなくなるのではないか。」と話をしても、なかなか聞く耳を持ってもらえず、頭を悩ませてしまいました。

首席行政官の話を尊重し、出来るだけ分かり易い説明を付けようとする計画担当官、両手を合わせて「プリーズ」と懇願してくる人事担当官、彼等の間を行き来しつつ彼等の言葉や仕草を真似るエンジニア。なかなかまとまらず大波乱が生じていた訳ですが、彼等のこのような説明や懇願する態度は、彼等が日常生活で見せている態度と同じで、大波乱の中でも、心温まる状況でした。



首席行政官が、ステアリング・コミティー会議で選定結果を説明する。

計画担当官は、日常生活でも細かい所が気になる性格で、理屈っぽく説明してくれる事が多いのですが、今回も首席行政官の主張が何とか通らないかと、一生懸命に理屈を考えていました。人事担当官は、日常生活でも従順で、首席行政官の指示を素直に聞いていますが、今回も素直に首席行政官の主張を通そうと、両手を合わせながら懇願してきていました。エンジニアは、日常生活でも首席行政官や同僚からまだ学習段階だと言われており、今回も周りを見ながら、それぞれの態度をまねするという事を繰り返していました。

最終的には、本省次官やプロジェクトリーダーからの説得もあり、公平性が保たれた結果が尊重されましたが、選定作業には一山ありました。

(近藤専門家：キャパシティアセスメント/コミュニティ開発担当)

4月27日に独立記念日を迎えたシエラレオネ。盛り上がったのは首都フリータウンだけではなく。カンビアでは、またしてもミスカンビアが開催され、独立記念日を盛り上げました。

今回は観客席から熱気あふれる会場のレポートと前回からの驚くべき進歩を遂げたミスカンビアの様子を前回と比較してお送りします。

独立記念日前夜、ミスカンビアコンテストはカンビア県議会議長の開会宣言で始まりました。なんと、今回はカンビア県議会の議長、副議長が揃って出席していました。

参加者は前回優勝のマグベマチーフダムを除く、サム、トンコリンバ、ビレディキシンの3ミスに新たにマンボロのミスが加わり、4ミスがエントリーしました。

会場は、昨年12月に開所したばかりの県議会施設“カンビアリソースセンター”です。

前回よりもステージが華やかになり、懐中電灯なしでもミスたちが見えるくらいの明るさになりました。第1の進歩です。

また、音響設備も前回より改善され、途中で音楽が途切れるというアクシデントもありませんでした。これは第2の進歩です。

ミスコンは、前回よりドレス審査が減り、4つのドレスと県議会の知識を問う問題で競われました。日付が変わる1時間前には、独立記念の演劇が行われ、ロンドン代表団が派遣されイギリスから完全独立を認めるよう要求し、その後、独立したときのエピソードが演じられました。劇中のエリザベス女王が独立を認め、シエラレオネが完全独立をしたところでカウントダウンが始まり、日付が変わると同時にハッピーバースディの曲が流れました。会場ではハッピーバースディコールに湧き、皆で50回目のシエラレオネの誕生日を祝いました。そう、第3の進歩は前回とは比べモノにならないくらい、しっかりとプログラムの時間配分がされていたところです。独立50周年の節目を迎え、新たなスタートを切ったシエラレオネ、少しずつでも着実に進歩しているのです。

気になるミスカンビアの優勝者ですが、前回準ミスのビレディキシンの接戦を破り、見事ミスカンビアの栄冠に輝きました。



手前から2番目が今回のミスカンビア。



劇の様子。中央がエリザベス女王役

コラム2：シエラの力 一次官秘書の戦略― by 近藤専門家

雨期に入り蒸し暑い日々が続く中、5月27日のJCCは、本省の会議室で行われました。円卓が整備され、エアコンも2台用意されている大会議室なのですが、長い間、エアコンが2台とも壊れたままだそうです。

仕方がないので、大型の扇風機を使用する事になりました。するとヤジャ氏「扇風機は上座ではなく下座の方へ置いておこう。」と言い始めました。大臣、副大臣、事務次官が座するのは上座なのに、扇風機がなくては、蒸し暑くて仕方がないではないかと思ったのですが、ヤジャ氏はそれを狙いたかったようです。

「蒸し暑いなあ。何故エアコンを入れない。エアコンが壊れている？何故修理しないのか。すぐに修理をしよう。」と本省のお偉方に決断してもらいたい、とヤジャ氏は考えたようです。

そして、下座の方に扇風機を置いて会場準備を進めていた訳ですが、いざ会議開始が迫ってくると、非常に悩んだ挙句、ヤジャ氏は戦略を見直す事にしていました。「何故扇風機を後ろの方へ置いている？」と責められる可能性の方が高く、やはりきちんと上座の方へ設置する事にしていました。おかげさまで、JCCの間、大臣等はおそらく快適に過ごしていただいていたようです。

そして、相変わらず、本省のエアコンは壊れたままです。いつかヤジャ氏の思いが届く日が来る、と信じています。



大臣（中央）等の後にある壊れたエアコンと大型扇風機。JCC会議にて。



右から2番目がヤジャ氏（ポートロコ県議会にて）。

(次号へ続く)

発行元：シエラレオネ 地域開発能力向上（CDCD）プロジェクト 編集長 平林

事務所：フリータウン事務所：地方自治地域開発省内、カンビア県事務所：同県議会内、ポートルコ県事務所：同県議会内

プロジェクト協力期間：2009年11月～2014年10月（5年間）

対象地域：カンビア県（25ワード：人口約30万人）、ポートルコ県（7ワード：人口約9万人）

カウンターパート：地方自治地域開発省、カンビア県議会、ポートルコ県議会

派遣専門家：平林リーダー、吉野業務調整、宿谷調達制度/道路計画専門家、近藤キャパシティアセスメント専門家、反町キャパシティアセスメント専門家、佐藤県・村落開発専門家（2010年5月実績）